倫風宏話

真のリーダーたれ

上廣榮治

アメリカの小説家ヘンリー・ミラーが「本当のリーダーというものは、人をリードする必要はない。ただ道を示すだけでよい」と言っているそうです。まさに至言というべきでしょう。

現実のリーダーたちのなかには、いろいろな人がいます。自分に甘く人には厳しいリーダー、驕り高ぶり威張るリーダー、人に対して不公正なリーダー、自分の利得や保身を優先するリーダーなどは、およそ人のリーダーたる資格に欠けた人たちです。

これに対して、「優秀なリーダー」と評される人たちは、「人を指導しよう、引っ張っていこう」という意欲が強い人たちです。そのため彼らには、細かなあれこれまで指図したり、すべてを仕切らなければ気が済まないなどの欠点もありがちです。しかし他面では、何事にも熱心で面倒見がよく弁も立ち、それ故、ある程度のところまでは確実に実績を上げられるリーダーたちです。

そして、この優秀なリーダーのもう一つ上の次元に、「真のリーダー」というものがあると、私には

思えるのです。

真のリーダーは、細かなことまで指図するようなことはいたしません。大筋で正しい道を示すだけです。これに対して、細かいことに囚われるリーダーは、しばしば進むべき道を逸れ、ときには道を見失ったりいたします。

よく、日本の政治家たちは重大な局面で些細な論議に囚われて「木を見て森を見ない」などと評されます。真のリーダーではないと言われているのと同じです。真のリーダーとは、常に過つことなく骨太の正しい本筋だけを指し示す人なのです。

では、真のリーダーはどのようにして「道を示す」のでしょうか。高邁深遠な理論を説いて人々の進むべき道を示すのでしょうか。厳しく他を批判し、激しくアジる（扇動する）ことによってでしょうか。あるいは、やさしく手取り足取り教えるのでしょうか。私にはいずれも違うように思われます。

真のリーダーとは、自ら行なう人、ただ黙々と歩む人なのではないか、そう思われるのです。彼は実践者なのです。彼が黙々として歩んだ跡に、人を仕合わせに導く「道」ができているのです。

おもしろいことに、今なお人々に「道」を示し続けている世界宗教の開祖たちや古代の偉大な哲学者たちには、共通して著書というものがありません。

釈迦は自ら出家修行をして悟りに至り、人々に道を指し示しましたが、著作は残されておりません。お経の冒頭に「如是我聞」、私はこのように聞いた、とあるように、釈尊が世を去った後に、弟子たちがそれぞれの記憶に残る師の言葉や実践の様子を記録したものが最古の経典なのです。

キリストもまた自ら荒野をさまよった実践者で、その言行は弟子たちによって今日に伝えられました。ムハンマドも著作を残しておりません。『コーラン』は神と一体になった状態のムハンマドが発した言

葉を周囲の人々が記録したものだといわれています。

『論語』という不朽の名著も、孔子の言行録です。孔子もまた実践の人であり、言説の人ではなかったのです。そのために、残された弟子たちが集まって「子曰く」、先生がこうおっしゃった、こんなことをなさったという書として編まれたものです。また、ソクラテスにも著作がありません。弟子のクセノフォンの『ソクラテスの思い出』やプラトンの対話篇などから、その思想をうかがい知るのみです。

彼らはみな理論の人ではないのです。何が正しくて何が間違っていると論ずるのではなく、体験的直観的に把握した道を、ひたすらに歩んだ真の実践者であったのです。そして彼らが歩んだあとに残された一筋の踏み分けが、やがて大きな「道」となった、私はそう思うのです。

わが会では、その創始のときから、この「実践」を重んじるという認識を堅持してきました。例えば、わが会最初のスローガンは「子供の善導は親の倫理実践から」であり、「朝起きはお国を興す第一歩」でありました。多言を弄することなく、実践をのみ掲げてきたのです。

例えば、親が子どもを教え導かんとするならば、うるさく指図するのではなく、自らが日々実践精進する姿において、子どもに道を示すほかはないのです。子どもたちはいつしか、親の背中を見て自発的に歩み始めるのです。

この「自発的に」ということが大切です。自発的に自分の正しい生き方を獲得するのでなければ、それは確かなものにならないからです。

現在、さまざまに教育の問題が取り沙汰されていますが、教育問題の根本的な解決には、親と教師、社会という、子どもにとってのリーダーたちが、自らの生きる姿をもって教えるほかに方法はないと私は考えます。同じように、社会教育団体としてのわが会の使命もまたそこにあります。会友一人一人が、

倫理の大道を率先して歩み、実践をもって正しい道を示すこと。そして、そうした真のリーダーを多数輩出すること。それが私たちの使命なのだ、私はそう思うのです。

ところが現実の社会を振り返ってみるとどうでしょう。自分のことは棚に上げ、他を批判し叱る人で満ち満ちています。政治家がいけない、官僚が悪い、上司がよくない、部下はダメ。では、自分はどうなのかとは考えません。多くの教師や親もまた、小言と叱責を常としながら、欲望に背を炙られて妄動する自分の醜い姿を子どもたちに見せています。彼らは「正しく生きよう」とする希望と意欲を子どもたちから奪ってしまっているのです。

真の実践者とは、人がどうであれ、大自然の摂理と対話して己の過ちを正し、不自然を排し、我も人もの仕合わせに向かって着実に歩一歩を進めて行く者です。彼こそ身をもって正しい道を示すが故に、真のリーダーなのです。

彼は自ら信ずる善き道を歩んでいるため、いつも上機嫌です。自分がひたすら正しい実践に邁進するかぎり、人もいつかはわかってくれると信じていますから、小言や叱責を口にすることもありません。

わが会の会友の皆さんは、世の朝まだきに、いち早く目覚めたる者であり、例外なく「真のリーダー」であることを求められている方々です。リーダーであることを自ら選んだ方々なのです。

どうぞ、真のリーダーであるべく倫理の実践に邁進していただきたいと思います。もしも、あなたが指導する人々のなかに、叱責すべきこと、指導しなければならないと思われる何事かを発見したときには、まず「己の実践に欠けたところはなかったか」「これは自分の影が映っているのではないだろうか」と省みてください。もし思い当たるところがあったなら、直ちに実践をもって正してください。皆さんは何よりもまず倫理の「実践者」であるのです。